



## 今号の内容

- ・第15回読売新聞国際協力賞
- ・プロジェクトニュース  
四川大地震、ジャワ島中部地震、ミャンマー・サイクロン(ナルギス)  
バングラデシュ・サイクロン(シドル)
- ・1月の予定
- ・活動記録

# 第15回「読売新聞国際協力賞」受賞スピーチ

特定非営利活動法人CODE海外災害援助市民センター代表を務めております芹田です。

このたびは第15回という節目の年に当たり読売国際協力賞を受賞できましたことを大変光栄に思っております。ご承知のように、CODEというのは、Citizens towards Overseas Disaster Emergencyの頭文字を取ったもので、直訳すれば、「海外災害緊急事態に立ち向かう市民たち」という意味であり、海外災害緊急事態が発生した場合に、これに関心を示し、たとえ1円の寄付という形であれ、行動に移す、そうした市民たちすべてを指しています。そして私たちは、そうした市民たちの中核に成るべくセンターを立ち上げ、法人格を取得しました。

そこで、海外で災害緊急事態が発生しますと、先ず、私たちが立ち上がります。そして、賛同して下さる市民の方々が、私たちに繋がって立ち上がります。私たちの組織は小さなものです。私たちが小さな身体で大きな仕事ができているとすれば、それは、ひとえにこうした多くの方々に支えられているからです。今回の受賞は、こうした方々が認められたということであり、喜びにたえません。また、私たちは被災地の人たちと繋がっています。この受賞はその方々の喜びでもあります。

さて、私たちのモットーは、「最後の一人」あるいは、「最後の一人まで」です。仮にここに100人がいるとします。過半数は51人です。3分の2の多数は67人で、最大多数は99人です。私たち民主主義、最大多数の最大幸福の実現は、「最後の1人」が切り捨てられます。効率的でないからです。しかし、私たちの経験は、災害の時、最後の1人が救出されるまで、

祈り、働いてきたことを教えています。私たちは、この最後の1人に寄り添おうとしています。小さき者、弱者・少数者のそばに立ちます。何ができなくとも、そばに寄り添うことだけはできます。黙って、一緒に、瓦礫を拾うことはできます。

こうしたことを実現しているのは、若い人たちです。中学生、高校生、大学生、フリーターと言われる人たちもいます。一緒に働いてきて、すでに30歳、あるいは40歳を超えた「昔の若者」もいます。この会場にもそうした若者が来てくれています。本日の読売国際協力賞は、そうした若者、そしてこれに続く「未来の若者」に与えられたものと考えております。本賞の受賞が若者を奮い立たせるものとなることを切に願っております。

本日は本当に有り難うございました。

11月5日 都内ホテル  
第15回「読売新聞国際協力賞」贈賞式にて  
CODE海外災害援助市民センター  
代表理事 芹田 健太郎



## 第15回「読売新聞国際協力賞」受賞！ 贈賞式レポート

11月5日（水）、帝国ホテル東京にて第15回「読売新聞国際協力賞」の贈賞式があり、CODE海外災害援助市民センターが本賞を受賞しました。当日は、私たちの原点でもある阪神・淡路大震災において共にボランティア活動をしてきた被災者やボランティア、これまでお世話になってきた関係者など約300人が参加して下さいました。小規模な団体ながら地道な活動が、結果としていろいろな方と共感し、そうした方々の多くの支えのもと、今回の受賞に結びついたと、改めて実感することになりました。



さて、式の中では、まず読売新聞グループ本社代表取締役議長より主催者挨拶、東京本社代表取締役社長編集主幹より本賞の贈呈がありました。その後CODE代表より挨拶（前ページ参照）があり、その後来賓祝辞として国連地域開発センター（UNCRD）兵庫事務所長よりお言葉を頂きました。特筆すべきは、すべてのスピーチに「若者」のキーワードが入っていたことです。みなさんが口にした「若者」とは、単に年齢的に若い人のみではなく、希望に溢れ夢を持った人、これからの将来についてまだ明確な指針を出せない人、目前の壁を乗り越えられず悩んでいる人など、さまざまな対象があるような気がしました。国際協力賞が意味するところが、これまでの過去の活動の賞賛に留まるだけでなく、これからの未来への期待を兼ね備えたものであるからこそなのでしょう。会場にも多くの「若者」が見受けられましたが、彼らがこの式典に出席して何を感じ取ったのでしょうか。気になるところです。

そしてこれまでのCODEの活動のスライド写真が流れました。阪神・淡路大震災を皮切りに、サハリン大地震、トルコ大地震等の支援を経て2002年1月17日にCODE海外災害援助市民センターを設立。その後、イラン・パキスタン・アフガニスタン・インドネシア・中国等々主なプロジェクトが紹介されました。忘れてはならないのは、私たちのこれまでの活動は、被災者との「痛みの共有」を根底に、支え合いの気持ちがあるからこそ成り立ってきたことです。さらにこの気持ちを、私たちだけでなく、他の災害支援団体や個人支援者、ボランティアと共有・意見交換をすることによって、活動の継続、さらなる発展を続けることができました。そういった意味で、今回の受賞はCODEだけでなく、災害救援・復興に関わるすべての方に対して贈られたものであると言っても過言ではありません。敢え

て言うなら小規模体制ながらそうした周囲の方のサポートを借り、アイデアや知恵を振り絞りながら根気強く被災者と向かい合ってきたことが評価されたのではないのでしょうか。今回の受賞を通して、これからもこのスタンスを貫き活動を続けて行こうと改めて強く思いました。

なお、先日アフガニスタンで亡くなられたペシャワール会の伊藤和也さんが特別賞を受賞されました。本来なら祝いの席だということで、伊藤さんの親族の方がお気遣い下さり、贈賞は式の前にすでに済ませたとのことでした。代わりにペシャワール会事務局長より伊藤さんの紹介があり、また駐日アフガニスタン大使からのメッセージもありました。同じ志を持った方が亡くなった事は非常に残念ですが、伊藤さんの遺影と並んでの贈賞式は、私たちに大きなメッセージを託されたような気がしました。



読売新聞国際協力賞  
震災の教訓 世界に  
CODEさらなる活躍誓う

被災住民主役 貫く

2008年(平成20年)11月6日(水曜日) 第1版



## [CODEプロジェクトニュース] 中国・四川大地震

今年5月12日に発生した中国・四川大地震の救援に対して、7月1日から8月17日まで第二次派遣を行いました。

四川省北川県香泉郷、遵道鎮において、被災者に寄り添う活動として、村人とともにガレキの撤去、臨時の住宅建設の手伝いをしました。瓦礫の中から使



瓦礫撤去作業を行うボランティアたち

える木材、レンガ、瓦を取り出しは分別する。レンガにくっついてきたセメントを削り落として再利用する。また崩れ落ちた柱をハンマーで叩いて、中から細い鉄筋を取り出す。作業を続けているうちに脆弱な構造が素人目にも見えてきました。「中国では縁をととても大事にする。毎日真っ黒に日焼けして頑張る日本人、韓国人、中国人のボランティアたちが農村の方と共に瓦礫を片付け、村の共同作業に参加すると村の一員のような感覚になってくる」とYさんは言います。また中国のNGOやボランティアたちに阪神・淡路大震災の経験などアドバイスを行いました。9月8日から11月4日までの第三次派遣を行いました。被災者への寄り添い活動を継続しながら、地域経済の活性化や観光業の復興など、地域の再生を支援するための調査を行いました。四川省は出稼ぎ大省といわれるくらい出稼ぎが多く、多くの若い男性は都市部に働きに出ています。現在は地震の被害によってますます出稼ぎに出なければならない状況であり、地元の産業を再生することが重要になってきています。



農村部の仮設住宅（北川県）

被災者にとってとりわけ頭を悩ませているのは「家の再建」です。地元の方に聞いたところによると、「比較的安い家を建てるのに7～8万元（約120万円）住宅かかる。

再建を急ぐ政府の復興計画から補助を受けるために急いでお金を工面する人もいる。」とのこと。しかし建て直した家が地震前と同じ構造で作られてしまえば同じ悲劇を繰り返すことになってしまいます。今後政府の支援計画と折り合いをつけながら、被災者の耐震住宅建設をどう支援できるかを探っていく必要があります。

このように地震が起こってからの2ヶ月半ずっといっしょに汗を流して働き、交流してきた中で村の人たちとの信頼関係が確実にできてきています。Yさんが香泉郷の村のお医者さんから、ぜひ自分の孫の名付け親になってほしいと頼まれ、後にその方の夫婦、娘夫婦から丁寧な感謝の手紙をいただくということもありました。これからも村とのつながりを大切にしながら、被災者の生活を支援するためにCODEとして何ができるのかを「被災者から学ぶ」「被災地から学ぶ」ということを大切に模索していきたいと考えています。

11月5日の読売国際協力賞授賞式のために帰国していたYさんから震災半年後の現地の様子を送ってきました。急速に進むように見える住宅再建も、一進一退。復興への道のりは始まったばかりだということです。現地からの最新レポートとして掲載します。

あの未曾有の災害から半年が過ぎた。被災地の各地には無数の仮設住宅群が広がる。と同時に、恒久住宅の再建も急ピッチに進む。CODEの支援する北川県香泉郷光明村でも住宅再建に被災者は忙しい。政府の方針で年末、もしくは春節（旧正月）まで入居しなければ補助が出ないという制約で多くの被災者はあせっている。また、早く住宅を再建して、出稼ぎに行きたいという思いもある。だが、最近の情報では、1年以内に再建すればいいという話を耳にした。青川県では2～3年以内だという。政府の方針が二転三転することで被災者は、困惑する。また、急ぐあまりに被災地の多くの場所で、道路沿いに延々とレンガを積んだ山が並び、耐震性の不十分なレンガ住宅が建設されている。

一方、学校、病院などの公共施設の再建も各地で進み、CODEの活動している香泉郷の中心小学校の建設も始まった。偶然にも、その小学校をデザイン、建設の支援をするのは、東京大学在学中の中国人留学生たちであった。つい先日、デザインが完成し、いよいよ着工されるのである。広大な被災地の中の小さな場所で偶然にもつながった日本と中国の「絆」を活かした支援を考えていきたい。



現地の伝統様式の家屋

## [CODEプロジェクトニュース] ジャワ島中部地震（呼び水プロジェクト）

### ・これまでの経緯 ～ゴトンヨロンの賜～

2006年のジャワ島中部地震で被害を受けたナワンガン集落は、乾期時の水不足の問題を抱えていました。1キロ先の県道には政府管轄の水道局が引いた主管が通っています。しかし、その主管から集落への水の供給の見通しはありませんでした。そこでCODEのからの支援金を元に、村人のゴトンヨロン（相互扶助の慣習）による支管設置が始まり、エコさん（今プロジェクトの現地キーパーソン、デュタ・ワカナ・キリスト大学建築学教授）の見守り中、予定された工事期間を短縮して終了しました。

これまで、不足分を民間の水業者から高価格で買っていましたが、支管ができたおかげで、安価な水を手に入れることができるようになりました。村内に現在3カ所メーター付きの給水口が設けられ、10日に2回の通水日に、順々に各家庭に配給されています。

さらに、この支管から得ることのできる利益を事業として発展させることにも成功しています。この支管の管理、運営を水道組合（村人主体）に委ね、各家庭に対して少し上乗せした（それでも十分安価な）価格で売ることによって利益を生み出しています。その利益の一部を組合員である村人のビジネスへの貸与、またはCODEからの借入金額をもとに戻すための積立として使用しています。

### ・神戸学院大学の御一行様、現地訪問！

神戸学院大学の浅野壽夫先生と学生数名が、インドネシアの農村開発を見学するという目的で、この呼び水プロジェクトの村を訪れました。現地臨時スタッフからの報告によると、学生も村人も大変喜んでくれた、ということです。村での呼び水プロジェクトの担当者であるハディさんも、支援のおかげで村人の生活が経済的に軽くなったと、笑顔を見せていました。



水道タンクの見学

### ・現在の状況・課題

パイプ敷設は無事に終わり、実際に村人の経済的負担は減っています。村の中でもとりわけ貧しい低所得者が、基礎出費となる水代金の負担減となることで得るメリットは大きいです。彼らの家計に少しでも余裕が生まれるということは、その余裕分を蓄えたり、他の生業の資金に回した

りする等、一般の村人の生活に近い暮らしができるようになることを意味します。このことが想像以上に生きる希望を彼らに与えるからです。

さらに、この安価な水道の管理を村人自身が行い、経営することによって、コミュニティビジネスに対する補助も行っています。具体的には、アヒルの雛を飼い、それを育てて食用鶏肉として売り出すことや、ナマズを養殖することです。実はこの敷設工事には費用全体の一割弱の赤字が出ているのですが、その分もこの水事業から少しずつ返還していくことに成功しています。

しかし村全体で言えば、まだ水の供給は足りているとは言えません。支管からの通水は10日に2回しかなく、必要量の半分しかまだ村人の手に届いていません。足りない部分は依然として水業者に高い代金を払って得ているという状況です。水道局の持つ水源をさらに増やして通水量を増やすように求めるなどの行動を起こす必要がありますが、それには限界があり、村の自立も含めて、最低限のインフラ設備である水の確保をどのようにできるかをこれからも模索していかなければなりません。

### ・これからの展望 ～エコさん来日を機に～

エコさんは11月14日から16日の間、神戸学院大学で開催された国際環境防災シンポジウムのパネリストとして来日されました。その時にCODEの事務所にも来て頂き、今後の展望等を話し合いました。協議の中心は「自立した水の供給源の獲得」です。以下がそのまとめです。



コミュニティの自立・防災を確保するためには、持続可能な農業の確保を中心に考える必要がでてきます。まず土地に保水力を付けるために、有機農法や砂漠緑化活動をしている方の知恵を借り、土地改善を行う必要があります。これにより地下水や井戸という水の供給源に手が届くようになります。現代の農業開発や環境保全技術をもってすれば、5年程度で目に見える結果が出てくる可能性があるのです。先を見据えて日々の生業と並行して行動を行う必要があります。自立した水の確保ができればこの地区で典型的な災害である旱魃による被害も少なくなるでしょう。この過程を通してコミュニティ強化や農業開発、地域防災の発展を生み出すのが狙いです。この長期的なプロジェクトを維持するためには、支援側もある程度腰を据えた対策が必要になってきます。財政的にも例えば「呼び水基金」の設立などを検討しているところです。



## [CODEプロジェクトニュース] ミャンマーサイクロン・ナルギス (HuMA復興支援プロジェクト)

CODEは、医療を専門とするHuMA災害人道医療支援会の復興プロジェクトに対する支援を行い、情報の共有を進めています。被害が広範囲に渡ることや、ミャンマーというお国柄もあって、なかなかすんなりとした進展はなかったわけですが、根気強いHuMAの活動が実を結び、今のところ病院の再建と清潔な水を確保するための井戸の建設が進められています。

ミャンマーにサイクロンが直撃したのは、今年の5月2日から3日です。死者・行方不明者は13万8千人にのぼります (UN、ASEAN、政府合同調査報告)。これまでHuMAは何度もミャンマーに人員を派遣してきました。5、6月は実際に医師を派遣し、8月にIOM (国際移住機構) との提携を結び、病院の再建プロジェクトをスタートさせました。9月、建築に詳しい調整員を派遣し、IOMミャンマー事務所にて再建プロジェクトの内容詳細について確認、協議を進め、さらに実際に被災医療機関の修復・再建状況についての調査も実施しました。この間、現地フィールドアシスタントとして、JICAでの業務経験があり、日本語でのメール通信が可能な方を雇用しています。10月にはこの方を通してIOMとの調整や、別件で進めている井戸ポンプに関する水質調査、設置方法などの検討を行いました。

そして11月には再度HuMAよりスタッフを派遣し、進行中の病院建設のモニタリングを行いました。また井戸建設プロジェクトについての現地カウンターパートとの協議と政府への説明を行いました。関係機関との協議には難しい局面もあったようですが、現在は政府社会福祉省の承認書類を受諾し、現地井戸掘りNGOとの資金等についての覚書を交わすことができました。

HuMAはこれらの活動と並行して、マラリアの予防のための教材の配布など、医療教育支援も検討に入っているようです。



ナルギスによって破壊された病院



現地の病院とHuMAスタッフとの情報交換

## [CODEプロジェクトニュース] バングラデシュサイクロン・シドル

サイクロン・シドルがバングラディッシュに上陸したのは、2007年11月15日の夜でした。政府発表では、死者・行方不明者は4000人以上、家屋全壊は約56万棟となっています。もともとサイクロンなどの風水害の多かったこの地域では、シェルターの整備や早期警戒システムの設置など防災対策が進められてきました。しかし被災者の復興支援や生活支援はまだ十分ではなく、貧困層を中心に苦しい生活状況が続いています。また死者の40%は子ども達といわれ、被害を受けた5歳以下の子どもは50万人だと推定されています。先日、現地で支援活動を行っている、バングラディッシュ防災センター (BDPC) より、孤児となった子ども達の支援の要請がCODEに届きました。具体的には孤児院の再建・環境整備などです。多くの孤児院が不規則な支援や地元の有志の援助によって成立しているため、慢性的に設備・資金共に不足した状態で運営されているようです。現地の情報を集め、BDPCとの協議を重ねながら、支援の方向性を決めていく予定です。



## 2008年1月のイベント紹介

もうすぐ15年目の1.17がやって来ます。毎年1月は震災関連の行事が目白押しですが、その中からいくつかご紹介します。

### 【災害メモリアルKOBE2009】

テーマ：生き方は伝わる～震災とわたしの仕事～

日時：2009.1.10 (土) 10:00～16:00

会場：人と防災未来センター

主催：災害メモリアルKOBE実行委員会

共催：人と防災未来センター、京都大学防災研究所

内容：

- ・作文発表「地しんが生んだもの」  
芦屋市立岩園小学校、神戸市立西郷小学校
- ・スペシャルセッション「わたしたちがみた四川大地震」  
兵庫県立舞子高等学校、神戸学院大学
- ・パネルディスカッション  
「生き方は伝わる～震災とわたしの仕事～」  
コーディネータ：矢守克也 (京都大学防災研究所)  
パネリスト：瀧ノ内秀都 (芦屋市立宮川小学校先生)  
林温子 (芦屋市立岩園小学校 先生)  
井上雅文 (神戸市水上消防署)  
井上奈緒 (神戸市西消防署 消防士)

申込・連絡先：災害メモリアルKOBE実行委員会事務局

TEL:078-262-5068 <http://www.dri.ne.jp/>

## 【2009年関西学院大学災害復興制度研究所フォーラム】

テーマ：どう果たすか国際支援～国家・社会・文化の壁  
超えて

日時：2009.1.12 (祝) 10:30～16:30

会場：関西学院大学会館レセプションホール

主催：関西学院大学災害復興制度研究所

後援：朝日新聞社

内容：

・プレセッション

村井雅清

(CODE海外災害援助市民センター理事・事務局長)

(聞き手) 山中茂樹 (関西学院大学教授)

・特別講演「海外支援～日本の役割」

姜尚中 (東京大学大学院教授)

・シンポジウム「どう果たすか国際支援」

コーディネータ：室崎益輝 (関西学院大学教授)

パネリスト：加藤孝明 (東京大学大学院助教)

齊藤容子 (UNCRD兵庫事務所研究員)

吉椿雅道 (CODEスタッフ)

ラジブショウ (京都大学大学院准教授)

申込・連絡先：関西学院大学災害復興制度研究所

FAX:0798-54-6997 <http://www.fukkou.net/>

\* 前日11日、被災地交流集会・復興デザイン研究会を開催  
宮城・栗駒、新潟、能登、鳥取・日野、三宅島、神戸など被災地からゲストを迎える。(会場：関西学院大学B号館104号教室)

## 【1.17メモリアルコンサート】

テーマ：詩の朗読と音楽の夕べ

日時：2009.1.17 (土) 開場18:00 開演18:30

会場：神戸新聞松方ホール

主催：ぼたんの会実行委員会

復興支援コンサート実行委員会

協力：神戸新聞文化財団

料金：前売り¥2,500、当日¥3,000

内容：詩の朗読 竹下景子

ピアノ・作曲 林晶彦

左手のピアニスト 智内威雄

申込み：神戸新聞松方ホール tel：078-362-7191

しみん基金こうべ tel：078-230-9774

ギャラリー島田 tel：078-262-8058 など

## 【国際協力入門セミナー】

テーマ：私たちにもできる国際協力

～世界に発信する兵庫の防災教育～

日時：2009.1.18 (日) 13:00～14:30

会場：JICA兵庫ブリーフィング室

主催：兵庫県国際交流センター、JICA兵庫

内容：・基調講演

芹田健太郎

(CODE海外災害援助市民センター代表理事)

・海外活動報告

永田宏和 (NPO法人プラスアーツ理事長)

兵庫県立舞子高等学校環境防災科

申込・連絡先：兵庫県国際交流協会協力課

TEL：078-230-3263

E-mail：icd@net.hyogo-jp.or.jp

## 【国際防災シンポジウム2009】

テーマ：災害にまけない地域づくり～兵庫から世界へ

日時：2009.1.19 (月) 13:30～17:40

会場：よみうり神戸ホール

主催：国際連合地域開発センター、読売新聞大阪本社

国際防災シンポジウム実行委員会

内容：

・基調報告1「兵庫県の支援を受けての学校復興」

モハマドレザ・ヤズダンパナ

(S N S 国際防災支援センタープログラムオフィサー)

・基調報告2「中国四川省、ブン川地震の復興事例」

袁昕

(北京清華都市計画設計院公共安全研究所副院長)

・基調講演

室崎益輝

(関西学院大学総合政策部教授/CODE副代表理事)

・現地レポート：バングラデシュ事例

スリランカ事例

ネパール事例

「ジェンダー視点と地域開発」 齊藤容子 UNCRD 研究員

・パネルディスカッション「防災から地域開発へ」

ファシリテーター：加藤孝明 (東京大学大学院助教)

パネリスト：万小鵬

(成都市都市計画管理局計画編成管理所長)

ディルバ・ハイダー

(バングラディッシュ防災センター副代表)

村井雅清

(CODE理事・事務局長)

ジェリー・ベラスケス

(国連国際防災戦略アジア太平洋事務局長)

申込・連絡先：UNCRD兵庫事務所

TEL:078-262-5560 <http://hyogo.uncrd.or.jp>

## 【国際防災・人道支援フォーラム2009】

テーマ：災害に強い医療施設：災害時の医療サービス確保のために～阪神・淡路大震災の経験を生かした兵庫・神戸からのメッセージ～

日時：2009.1.25(日)13:30～17:30

会場：神戸ポートピアホテル トパーズの間

主催：国際防災・人道支援フォーラム実行委員会、

UN/ISDR兵庫事務所、

WHO健康開発総合研究センター、

(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構、

人と防災未来センター

- 内容：
- ・キャンペーン進捗報告
    - サルパノ・プリセーニョ  
(国連国際防災戦略(UN/ISDR)事務総長)
    - ジェイコブ・クマラサン  
(WHO研究開発総合研究センター所長)
  - ・基調講演
    - クロード・ドゥビル  
(元全米健康期間(PAHO/WHO)災害対策局長・2005年度国連SASAKAWA防災賞(認定書)受賞者)
  - ・事例報告
    - 後藤武  
(兵庫県健康財団副会長兼理事長)
  - ・パネルディスカッション
    - コーディネーター：山本保博  
(人と防災未来センター上級研究員・東京臨界病院院長)
    - パネリスト：小澤秀一  
(兵庫県災害医療センター長)
    - スペディ・ジシュヌ  
(UNCRD兵庫事務所)
    - 池内淳子  
(地震防災フロンティア研究センター研究員)
    - ジェスタシオ・ラピタン  
(WHO健康開発総合研究センター)
    - 山本 あい子  
(兵庫県立大学地域ケア開発研究所長・世界災害看護学会理事長)
- 申込・問合せ：人と防災未来センター事務局  
 TEL：078-262-5068 FAX：078-262-5082  
 E-mail：dra.secretariat@gmail.com

- 10月18日 災害看護支援機構主催の”復興と災害看護”で講演(村井理事)
- 11月2日 防災士研修・金沢(村井理事)
- 11月5日 読売国際協力賞贈賞式  
(芹田代表、村井理事、黒田理事、吉富理事、吉椿、東条、尾澤、岸本、法化図)
- 11月6日 2008「地震にまけない学校計画」国際防災シンポジウム(UNCRD兵庫主催)にパネリストとして講演(村井理事)
- 11月15日 国際環境防災シンポジウム「社会貢献 そしていのち」(神戸学院大学主催)に参加(村井理事、吉椿、東条、尾澤)ひょうご防災リーダー講座で講義(村井理事)
- 11月19日 龍谷大学で講義(村井理事)
- 12月1日～1月8日(予定) 四川地震第3次派遣(吉椿)
- 12月5日 関西学院大学で講義(村井理事)防災士研修・大阪(村井理事)
- 12月10日 甲南女子大学で講義(村井理事、尾澤)

## ありがとうございます 7/11～12/24

### 会員・寄付者ご芳名(以下順不同・敬称略)

#### 一般寄付

**個人：**小林郁夫、島本久嗣、慶児純子、山田千恵子、成毛典子、笠置りか、井上雅楽緑、篠田節子、田辺エツ、武谷孝生、及川紅、小林芙佐子、旦保哲夫、岡本牧子、浦崎なぎさ、細川裕子

#### 会員

##### ・正会員

**個人：**松本誠、村井雅清

##### ・賛助会員

**個人：**藤原ミサ子、小林郁夫、玉岡昇治、菊田歌雄、水野雄二、中谷勇一、宮本秀利、不破雅実、岸田三枝子、山田千恵子、江口節、芦澤礼子、及川紅、広川嘉宏、岡本牧子、山本佳子

## 活動記録 7/11～12/24

- 7月9日～19日 JICA草の根技術協力事業(地域提案型)アフガニスタン農業研修(村井理事、尾澤、山田)
- 7月20日～24日 サラゴサ国際博覧会に参加(村井理事)
- 7月26日 防災士研修(大阪会場、村井理事)
- 7月27日 震災語り合いサロン  
(人と防災未来センター、尾澤、東条)
- 7月28日～29日 北京で顧先生と会談(村井理事、吉椿)
- 7月30日 堺女性大学で講演(村井理事)
- 8月20日 兵庫県立大学夏季講座で四川地震報告(吉椿)
- 8月25日～29日 留学生セミナー(村井理事、細川)
- 8月27日 コープこうべで四川地震報告(吉椿、村井理事)
- 8月28日 世界語り継ぎ研究会に参加(細川)
- 9月6日 HuMAミャンマー報告会参加(村井理事、尾澤)
- 9月8日～11月4日 四川地震第3次派遣(吉椿、東条)
- 9月14日 ピースフェスティバル2008四川地震パネル展示
- 9月26日～29日 四川派遣(村井理事)
- 10月7日 舞子高校で講義(村井理事)
- 10月11日 世界語り継ぎ研究会WSに参加(細川)

## 終わりに

中国四川省、ミャンマーの現場では、これまで支援した地域、例えば2004年の津波災害を受けたスリランカなどと比べると、やはり何かと難しい場面にぶつかることが多いのも事実です。そのような中でも中国四川省のニュースの中で触れた、Yさんに自分の孫に名付け親になることを頼んだお医者さんからの感謝の手紙の中に「災害は無常だけれど人には情がある。」という言葉がありました。このように被災者に寄り添いながら、痛みの共有、分かち合いを大切にしながら、じっくりと被災地とそこにいる被災者にこだわっていきたくて考えています。みなさまよいお年をお迎えください。来年もよろしくお祈りします。